

2026(令和8)年度 入学試験問題

学校推薦型選抜

文学部 人間関係学科
小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時00分から15時00分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

[文章1] と [文書2] を読み設問に答えなさい。

[文章1]

著作権保護の観点から、公開していません。

-
- 1 philosophical 哲学的な
 - 2 Socrates ソクラテス／ギリシアの哲学者
 - 3 Zen 禅
 - 4 assumptions 思い込み／憶測
 - 5 data-driven データ主導型
 - 6 staggering 驚異的な
 - 7 amid ～のさなかに
 - 8 avalanche 雪崩
 - 9 triggers 引き金
 - 10 retrieving 引き出す
 - 11 flattened そぎ落とされる／無力化される
 - 12 fixation こだわり／執着

著作権保護の観点から、公開していません。

(Adapted from “The hidden power of unanswerable questions” *Thinking*,
March 25, 2025.)

¹³ lifelong passion 生涯の情熱／ライフワーク

¹⁴ small talk 世間話／おしゃべり

¹⁵ shovels シャベル／スコップ

¹⁶ neat きちんとした

¹⁷ tidy 整った

【文章2】

バンコクの中高生向けにオンラインで「授業」をしている。三月に一度くらいのペースで、もう4年になる。今回のテーマは「AI（人工知能）によって世界はどう変わるか」だった。あらかじめ私のほうから論点を示して、それについて生徒たちの意見を求め、それに答えるかたちで私が話をする。AIについての生徒たちの反応は否定的6割、肯定的4割というくらいの比率だった。

否定的な子たちは Chat GPT（対話型人工知能サービス）で、すらすらとエッセイが書けてしまうということに困惑していた。生成 AI が出力した文章をそのままレポートとして出す子が学校ではいい点を取ってしまう。これはフェアではないし、その子の知的成長にとってもよくないということを複数の生徒が書いていた。そのとおりだと思う。

生徒が提出した課題が自分で書いたのか、生成 AI が書いたのかを識別することは教師には難しい。Wikipedia を丸写ししたレポートなら、キーワードをチェックすれば、どこから盗用したかがすぐにわかる。生成 AI の場合は、生徒が入力したのと言葉句変わらない文章を教師が打ち込まない限り、それを AI が書いたとは証明できない。教師が頼れるのは「こんなレベルの高い文章をあいつが書けるはずがない」という心証だけである。でも、それを理由に低い点数をつけることはできない。

たぶん生成 AI だけであらゆる課題を切り抜けて、学部の卒論も AI に書いてもらって卒業したという学生もそのうち出てくるだろう。いずれ学位論文も AI に代筆してもらった「研究者」が登場する可能性だってある。だが、果たしてこの人を「研究者」と呼ぶことができるだろうか。私は「できない」と思う。それはその人に十分な学術的知識がないからではない。「知識についての知識」がないからである。

自分の知識についての知識とは、自分が何を知っていて、何を知らないのかについての「俯瞰図」のようなものである。メタ知識と言ってもいい。この辺についてはそこそこ知っているが、この辺りはほとんど不案内で、この先になるともう真っ暗闇というような自分の知についての自己評価である。その「俯瞰図」をつねに参照しながら、研究者は自分の道を歩む。「不全感」や「無知であることの疚

しさ」や「もっと知りたいという向上心」などに駆動されて研究者はその仕事をするのである。

AIには「不全感」や「疚しさ」や「向上心」のような感情はない。機械だから当然である。でも、生成AIにずっと代筆してもらってきた子どもには、その感情が感染してしまうのではないかと私は危ぶむのである。

Chat GPT が公開されたのは2022年11月である。まだ2年少ししか経っていないが、たぶん今は数億人が日常的に使っている。それがユーザーの思考にどのような影響を及ぼすかの研究はまだなされていない。でも、日常的に「知らないことについても知っているふりができる」ということを長く続けていると、いずれ知性の働きに何らかの影響が出ることは避けられないと私は思う。

自分が何を知っていて、何を知らないのかについての俯瞰的な知、「知についての知」は知性的であるためには必須のものだと私は思う。けれども、生成AIを文房具にしている子どもたちには「知についての知」を持つ必要がない。キーボードを叩けば、知りたいことは何でもわかるのだから。知るために資料を渉猟^{しやうりやう}する必要もないし、仕入れた知識を記憶しておく必要もない。

生成AIは子どもたちの知的成熟を支援してくれるものなのか阻害するものなのか、私にはまだわからない。

(内田樹、「『生成AI』と知性」『週刊金曜日』2025/2/28(1510号)による。ただし出題に際して原文の一部を改めた。)

問1 下線部①にある「問いの真の可能性」とはなにか、日本語で述べなさい。
(40点)

問2 下線部②にある「問いは答えのために存在するのではない」とはどういう意味なのかを日本語で説明しなさい。(40点)

問3 [文章1]と[文章2]の内容をもとに、「これからの私たち人間の学びと生成AIとの関係」を考える上で有効になる一つの「問い」あるいは「仮説」を立てなさい。その上で、事例や根拠を示しながら自分が立てた問いに答えなさい。問いと答えを合わせて日本語で800字以内。議論や考察の過程を評価するので、必ずしも明確な結論にいたらなくてもかまわない。(120点)